



### Lorenz LP-312 Type-2 初期

←Type-1と全く同じユニットでツイーターが2個搭載されたモデル。こちら2μのコンデンサーでローカットされた2個のツイーターがウーファーと平行でつながっているため、少し高域が強調されている。比較的大きめの箱でバランスが取れるように設計されているようだ。市場価格は25万円前後



### Lorenz LP-312 Type-2 後期

→一見すると別モデルに見えるが、初期タイプとほぼ同じユニットが使われている。まずツイーターは指向性の拡散のためと思われる小さい穴の空いた薄い金属製のディフューザーでカバーされている。また、ウーファーのセンター部分には中高域用の赤いサブコンが追加され、よりツイーターとのなじみが良くなっている。市場価格は25万円前後

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

### Lorenz LP-312 Type-1

このLP-312シリーズはフィックスエッジの30cmのシングルコーン型ウーファーに英国BBCモニターのパルメコにも採用されたことで有名な約5cmのポリプロピレン系のコーン型ユニットLPH-65を搭載したものだ。Type-1はこのツイーターを1個採用したモデルでウーファーとツイーターのバランスが良く、比較的小さな箱でも十分に鳴らせるのが特徴。ネットワークは搭載せず、ツイーターは2μのコンデンサーでローカットされてウーファーと平行駆動しているため、ユニットの良さが最大限引き出されている。重心の低い深みのある解像力の高い再生音は他社の同軸ユニットでは味わえない魅力がある。市場価格は20万円前後

## 第8回 ドイツのフルレンジユニット vol.2

### Lorenz/Isophon

ドイツ系の同軸ユニットの特徴として、ツイーターに紙やポリプロピレンのような素材のタイプが多いこと、それから30cm口径のユニットが中心でアメリカや英国系のユニットのような38cmのタイプはほとんどない。これらは比較的小音量でもウーファーとツイーターのバランスが取りやすい利点も兼ね備えており、独立したツイーターを搭載した2ウェイユニットにも関わらず、その存在を感じさせず、まるでシングルコーンのユニットが鳴っているような特徴がある。

本文/ 田中伊佐資

キャプション/ 岡田圭司 (アトリエJe-tee代表)  
撮影/ 田代法生



# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

# ドイツのフルレンジユニット

Vol.2



### Isophon PH-2132

←ドイツはかなりの多くの楕円ユニットを生産してきたが、その中でも珍しい大型同軸ユニット。サイズはモデル表記のように21cm×32cmとなっている。このモデルに搭載されているツイーターユニットには有名なドイツ・シーメンス社のワイドアングルに搭載されている25cm同軸ユニット(俗称/鉄仮面)と同等品が搭載されている。前号でもドイツ製の楕円ユニットの優秀性について紹介したが、このPH-2132は口径サイズもかなり大きく、しかも2ウェイ構成となっているため、よりスケールの大きな再生能力を持ち合わせている。市場価格18~20万円

### Isophon Orchestra

→30cmのウーファーにPH-2132と同じツイーターを搭載した2ウェイモデルになる。構造的には比較的重心の低いウーファーにシーメンスの25cm同軸ユニットと同じようにツイーターがセンターにネジ込みで固定されている。こちらもネットワークは搭載されず、やはり2μのコンデンサーでローカットされてウーファーと平行で接続されている。市場価格は25万円前後



# 工業製品というより楽器っぽい ドイツ製ユニットでダメ押しっ!

前回28号に掲載のロレンツとRFTのドイツ製フルレンジは存外によかった。存外というときみくびっていったことになるけど、見かけは大したことないから、本当にそうなのだよ。いささかの逡巡もなく、気持ちよくサツツと音が出てくる。工業製品というより楽器っぽい。なんだか化かされているような気分を引きずったままドイツ製ユニットが今回も続く。テーマは同軸ユニット。2ウェイでレンジが広がりより大型になった。皮切りはロレンツのLP-312タイプ1だ。ところでいきなり話がそれるが、この密閉型エンクロージャーがかっこいい。アトリエJe-teeのオリジナル。店主の岡田さんが言うには、やはりドイツのクラウンフィルムのスタジオモニター風に設計したという。本題と外れるので写真を載せていないが、渋い銀色でレトロ&モダンな雰囲気をもたらしている。サイズは大きすぎないフロア型。これなら世の奥さんに怒られない。世界のスピーカーメーカーは歴史をもっとひもとくべきと思つた。

あえて新しい録音のダイアナ・クラールがかかる。アンプはマッキントッシュのC22とウエスタンのライセンクスアンプG101A。きつちりと新しい音がする。ナローレンジで鼻つまみ声なんてことはまったくない。そしてダイアナはトロリと色っぽく欲情していた。この濃さこそある意味、ヴァインテージスピーカーの独壇場という気がする。さらに現代録音のワイドレンジソースに対応できれば、無敵に近いなと思つていたところへ、ビンテージものの難関ともいえるフュージョン(リー・リトナー)がけっこの音量で飛び出してきた。ギターは甘美な音色で良好、問題はエレベとドラムのアタックだ。瞬発力も粘りもある。ウーファの振動板が厚めでガッチリしているためと岡田さんは解説してくれた。音、デザイン、サイズをひっくり返るため総合点はかなり高い。2つめがイソフォンのPH2132。32×24cmの楕円型。出たな楕円! 前回、RFTの楕円ですっかり幻惑されてしまったのだ。同じダイアナを聴くともっと若返って明るい。ロレンツのしぶみが後退してのびやかになった。ただ、さっきほど発情はしていない。発情して欲しいけど音の出方としては、こっちが好みかなと思つたが、次にヘレン・メルルがかかって、いや待てよとなった。実在感があるロレンツは、ダイブなヘレンにうまくマッチしている。さて、ここで再び化かされてしまった。イソフォンのエンクロージャーが後面開放型と今ごろ知った。前回もこれでやられた。箱の力を借りずになんでもこうもしつかり低音が出るのだ。大音量でシンフォニーをかけるとふわっとした空気がやってきた。ドイツ製楕円スピーカーの神秘、これでダメ押しっ。